

石坂の鶏頭けいとう豆まめ

昭和五十七年十二月五日号

明治末年、日本メソジスト吉原教会に山中笑さんという牧師がいました。彼は号を共古きことい、「吉居雑話きちいざつわ」と題する民俗学的な著作をまとめました。

今回は県立富士東高校の加藤善夫先生のご協力を得て、「山中共古調査ノート」の中からのお話です。

弘法大師が通りかかって

ある秋の日、名僧弘法大師が旅の途中、石坂を通りかかりますと、農家の老婆が大声で老夫を罵ののっているのが目にとまりました。

「いつたいたいどうされたというのじゃ」

「これはこれはお坊様、まあ、ちよつくら聞いてください……。」

老婆の話すには、今年に限ってどうしたわけか、老夫は畑に豆をまくのを忘れて、鶏頭けいとうの種だけまいてしまったというのです。

「みてくだせ工。豆は一つぶも収穫されず、これでは味噌も何にも作ることも出来ねえです。」

なるほど畑は一面真赤な鶏頭の花が見事なほど咲きほこっていました。大師は静かに笑って老夫婦に向い、

「これに鶏豆けいとうまめという豆が出来るから今に見ていなさい。」

と言つて立ち去りました。

それからというもの、この石坂には鶏頭豆という大豆に似た豆が収穫されるようになったということです。

この豆は一本の木から二合(〇・三六斗)の豆がとれましたが、いつの間にか栽培する人も絶えてしまつたようです。

